

2014
Vol.
9

専修大学のビジョンと現状

Si-report

Socio-Intelligence report



建学の精神と21世紀ビジョン「社会知性の開発」

専修大学は、1880年(明治13年)、米国留学から帰国した4人の若者により創立されました。相馬永胤、田尻稲次郎、目賀田種太郎、駒井重格の創立者たちは、明治維新後、米国のコロンビア、エール、ハーバード、ラタース大学にそれぞれ官費や藩費により留学し、米国の地で「専門教育によって日本の屋台骨を支える人材を育てよう。そのことが海外で長年勉強する機会を与えてもらった恩に報いることだ」と考えました。帰国後、経済学や法律学を教授するため本学の前身である「専修学校」を創立しました。わが国があらゆる分野において新時代を担う人材を求めた時代にあって、留学によって得た最新の知見を社会に還元し、母国日本の発展に寄与しようとしたのです。いち早く近代法の考え方をわが国に根付かせようとした本学は、五大法律学校の一つとして重要な役割を担いました。

以後、本学は関東大震災や戦禍などによって極めて困難な状況に直面しながらも、学窓の灯火を守り続けてきました。21世紀に入った今日においては、私学全体にふりかかる大きな荒波を乗り越え、さらなる発展を遂げなければなりません。常に創立の原点に立ち返り、本学の進むべき指針を熟慮するとき、自ずと道は拓かれます。その指針として、本学は建学の精神である「社会に対する報恩奉仕」を現代的に捉え直した「社会知性(Socio-Intelligence)の開発」を21世紀ビジョンに据えました。

今日、グローバル化の拡大と異文化交流の進展、情報化の加速、少子高齢化の進行など、我々が取り組まなければならない課題は山積しています。これらの社会的課題を解決するためには、地球的視野から諸問題を捉える力、創造的発想力、さらには深い人間理解や倫理観が求められます。こうした新時代の社会で求められる知性こそ、「社会知性」だと専修大学は考えます。それは、学生一人ひとりが自己実現に生かせる知であると同時に、「専修大学が創り育てる知」でもあります。

.....

専修大学21世紀ビジョン

「社会知性(Socio-Intelligence)の開発」

.....

社会知性(Socio-Intelligence)とは

専門的な知識・技術とそれに基づく思考方法を核としながらも、深い人間理解と倫理観を持ち、地球的視野から独創的な発想により主体的に社会の諸課題の解決に取り組んでいける能力である。

「全学の叡知を結集し、 新時代にふさわしい大学へ」

専修大学長 矢野 建一

専修大学では、この四月を期して新しい教育システム「新たな学士課程教育」をスタートします。この「新たな学士課程教育」は、本学の21世紀ビジョンである「社会知性の開発」の諸課題に応え、学生「一人ひとりの将来につながる学び」を保証しようとするものであります。高校までの「お仕着せ」の学びと決別し、あらたに「みずから」専修大学で学ぶことの意義を修得する「転換教育課程」、教養・専門教育へのゲートでありジャンピングボードでもある「導入教育課程」、そして学際科目・新領域科目などの「融合領域科目」によって連係された「専門教育課程」と「教養教育課程」という、4つの領域と3つの階梯からなる科目群を新規に展開することになります。この改革は、昭和24年の新制大学の発足に際して「教養教育課程」と「専門教育課程」に区分された教育課程の真の融合をめざす歴史的な取り組みでもあります。

21世紀は、情報化・グローバル化が急速に進む「知識基盤社会」と言われています。さまざまな分野で「知の地殻変動」(日本学術会議 2010)が生起し、既存の学問・教育体系やその枠組が大きく揺らぎ始める時代とも評されています。欧米・国民国家中心、男性・おとな・健常者中心の世界観や、福島第一原子力発電所の事故に端的に見られるように、功利性・効率性・有用性を自明の前提として追求してきた科学技術や「知」の体系が根底から問い直される時代に入ったとみて間違いありません。先般、さまざまな学内論議を経て、特任教員・客員教員制度の学部への導入を決定しましたが、この制度は「知の地殻変動」によって生じた新しい領域、いわゆる境界領域や新領域で活躍する実務的研究者、さまざまな社会活動の経験を持つ研究者を積極的に受け入れ、「知の地殻変動」に対応しうる新たな研究・教育体制を整備しようとするものです。

さらに、本学にとってはスポーツの振興と、スポーツ学生への学業支援も大きな課題です。ソチ冬季五輪ではOG(平成22年商学部卒)の小野塚彩那選手の銅メダル獲得、経営学部1年の近藤太郎選手の活躍が話題となりました。これまでスポーツについては、スポーツ推薦入試における受け入れ数や制度そのものに議論が終始してきましたが、どのような学業支援が可能なのかを考えながら、

新しいシステムを模索してまいりたいと思っています。また、大学が11世紀末にイタリアの自由都市のボローニャの市民達によって開設されたことから明らかなごとく、大学にとって都市(地域)との連携は不可欠なものです。川崎市との「KSパートナーシップ」や小田急電鉄との「連携・協力に関する基本協定」、高大連携協定校が15校を超えるなど、さまざまな取組みを行っていますが、今後もよりいっそうの連携強化に努めてまいりたいと思っています。

こうした教育、研究、スポーツの発展には、キャンパスの整備の問題を避けて通ることはできません。神田5号館をはじめ、生田の「新生田2・3号館(仮称)」、「専修大学国際交流会館」、「生田新体育寮・新体育館(仮称)」などの工事も着々と進んでいます。しかし最大の懸案は、こうした神田・生田校舎を包括する大学全体のキャンパス構想の策定です。なかでも神田靖国通り沿いに取得した新校地は、複数学部の授業を都心で展開することができる規模であります。さまざまな可能性が想定されますが、生田キャンパスを含む総合的なグランドデザインの策定が喫緊の課題です。創立140年に当たる2019年までには新校舎を完成させ、新時代にふさわしい大学としての基盤を整備したいと考えています。このため平成26年度には早々に「専修大学キャンパス検討会議」(仮称)を立ち上げ、法人と緊密に連携しながら、ソフト、ハード両面の方向性を確定したいと思います。

今から66年前の昭和22年11月、奇跡的に戦火をまぬがれた神田校舎で第68回の大学祭が開催され、その場で新制大学への移行と「建設委員会」の設置が決議されました。この前年には総長に推挙された今村力三郎を中心に新制大学に向けた取組みが開始されており、この時「建設委員」には、学生・教員・校友など36人が代表委員に選出されたといわれています。専修大学は特定の財閥や団体を後ろ盾に持たない大学であります。しかし大学の困難や大きな改革に際しては関係者が集まり、その叡知を結集し、事に当たる誇るべき伝統を持っています。専修大学の21世紀ビジョンである「社会知性の開発」によりいっそうのご理解とご支援をお願いいたします。

Profile



【横顔】故郷(長野県伊那市)に帰り、社会科教師となることを夢見て上京。1966年開設の専修大学文学部の3期生。人文学科歴史学コースで学んだ。ゼミ指導の故松本新八郎教授から「徹底的に鍛えられました」。テキストクリティークの精神、モットーである「歴史を『鏡』にする」(正しく向き合って自身の見識を磨く。自分の外に鏡を置いて多面的に映すことを心がける)姿勢は、この時代に培われた。

歴史を鏡に

専門は日本の古代史、文化史。宗教が日本の政治、経済、文化に与えた影響を探る。話題を呼んだ遣唐使「井真成」の墓誌発見(中国西安市・2004年)の際は、国際交流協定校の西北大学との共同研究プロジェクトで日本側代表を務め、墓誌をめぐる謎に迫った。家族は妻と一女。趣味はミステリー小説の読書。謎解きに興味を持つ。

【略歴】1949年長野県伊那市生まれ。72年専修大学文学部卒業。80年立教大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学修士。92年専修大学文学部助教授。98年教授。文学部長(2006~10年)などを歴任。専攻は日本古代史、日本文化史。最近の著作:共著『遣唐使の見た中国と日本』(05年、朝日新聞社)・共編者『長安都市文化と日本・朝鮮』(06年、汲古書院)・共編者『長安都市文化と日本・朝鮮』(06年、三秦出版、*前記を日中同時に刊行、中国語版)・共著『地域のなかの古代史』(野田嶺志編、08年、岩田書院)など。

専修大学の「学び」が変わります！

大学生活だけでなく、社会に出てからも必要な能力を、学部に関わらず身につけることができるカリキュラムへ変わります。

Point 1

大学での学び方を身につける「専修大学入門科目」を設置

高校までとはまったく異なる大学生活だから、専修大学入門ゼミナール（1ゼミ当たり約20～25名）で、大学の学びや生活にスムーズに転換できるようにします。

Point 2

大学での学びの基礎を固める「専修大学基礎科目」を設置

教養・専門教育の入口として、大学で、そして社会で求められる必要な知識と技能・能力を伸ばしていくための専修大学基礎科目（基礎統計学、キャリア教育関連科目、情報リテラシー関連科目、基礎自然科学、外国語基礎科目、スポーツリテラシー）を、全学的に展開し、履修できるようにしました。

Point 3

興味・関心を深化させる「教養科目」を強化

専修大学基礎科目をさらに充実させた内容を興味と関心に応じて人文科学基礎関連科目、社会科学基礎関連科目、自然科学系科目、外国語系科目、保健体育系科目からバランス良く履修できます。違う分野から見ることで自分の専門分野を異なる角度から捉えることができます。

Point 4

専門と教養をつなぐ「融合領域科目」の設置

複雑化する現代社会を様々な視点や広い視野から理解するために、教養科目と専門科目を結びつける融合領域科目を充実させます。

Point 5

「専門科目」をさらに強化

専門科目も基礎から応用・発展的内容への段階的な科目配置とし、高等学校までに学ぶ機会のなかった分野についても、しっかり基礎から学ぶことができます。

※新たな学士課程教育は一部全学部を対象としています。

専修大学 新たな学士課程教育



専修大学では、学生たちが段階的に「大学の学び」を理解し、無理なくゴールを迎えられるよう2014年4月から新たな学士課程教育をスタートさせました。

新たな学士課程教育では、転換教育・導入教育・教養教育・専門教育の4課程を5つの学習プログラムに分けて構成しています。5つとは、「大学の学びを知る(入門科目)」、「大学での学びの基礎を固める(基礎科目)」、「興味関心を深化させる(教養科目)」、「専門と教養を融合した学びでさまざまな視点から社会を理解する(融合科目)」、「各学部・学科の専門を着実に極めていく(専門科目)」になります。

たとえば、大学の学びを知ることを目的とした転換教育課程では、専修大学の歴史を学ぶことで本学生としての自覚を促すだけでなく、ディベートの方法や論文の書き方といった学業のベースとなるアカデミックなスキルを養っていきます。

学生たちはこれら4つの課程を通し、複雑化する現代社会を生き抜く知力を身につけることができます。

専修大学 新たな学士課程教育 詳細

スムーズにステップアップできるから大学の学びがもっと面白くなる、
夢中になれる新しい学びの体系です。

Point 3

興味・関心を
深化させる。

Point 5

各学部・
学科の専門を
着実に
極めていく。

4 年次

3 年次

2 年次

1 年次

Point 2

大学での
学びの基礎を
固める。

Point 1

まず
大学の学びを
知る。

専修大学入門科目

少人数制(約20～25名)のゼミナールで
高校生活から大学生活への転換を図り、
大学生活で求められる基本スキルを
養成します。

専修大学入門ゼミナール

- ・大学で学ぶ意義
- ・専修大学の歴史
- ・大学での学び方
- ・専修大学の施設の有効な使い方
- ・アカデミックスキル(レポートの書き方や発表の仕方など)の修得

専修大学基礎科目

社会で求められる必要なスキルを含む
科目を通じて、大学および社会で求めら
れる基礎力を養成します。

専門入門ゼミナール

基礎統計学

キャリア教育関連科目

情報リテラシー関連科目

基礎自然科学

外国語
基礎科目

英語

英語以外の外国語

スポーツリテラシー

※設置科目は学部によって異なります。

教養科目

専修大学基礎科目をさらに深化させた内容を以下の科目から履修できます。専門科目のみならず、これらの分野を深化させていくこともできます。違う分野から見れば、自分の専門も違った角度から捉えることができるようになるでしょう。

人文科学基礎関連科目

社会科学基礎関連科目

外国語系
科目

英語

英語以外の外国語

海外語学研修

自然科学系科目

保健体育
系科目

スポーツウェルネス

アドバンススポーツ

スポーツ論群

学部・学科によって科目への関連性を考慮した基幹科目を中心に1～2年次に学びます。専門に隣接する分野の内容を学ぶことで、異なる角度から自分の専門を捉えることができるようになります。

英語・英語以外の外国語とも、基礎科目を踏まえ、段階的に学べます。また、外国の文化や社会など異文化理解につながる日本語の講義科目を新たに展開します。

自然科学系や保健体育系は、学びに必要な知識・技能としてだけではなく、これらの分野を深めていくこともできます。

融合領域科目

複雑化する現代社会を様々な視点や
広い視野から理解するために、3つの
タイプの融合科目を展開します。

学際科目

テーマ科目

新領域科目

Point 4

専門と教養を
融合した学びで
様々な視点から
社会を理解する。

専門科目

基礎から発展・応用的内容へと段階的
な科目配置になり、無理なく専門性を
高められます。

基礎 ▶ 応用

※専門科目の内容は、学部・学科毎に異なります。

専修大学の「学び」はここから始まります ～高校から大学への「転換」と大学教育への「導入」～

「社会知性(Socio-Intelligence)の開発」と「新たな学士課程教育」の連関

専修大学が掲げる「新たな学士課程教育」は、21世紀ビジョン「社会知性(Socio-Intelligence)の開発」の下、複雑化すると共に課題が山積する現代社会において自ら課題を見つけ、解決していく力を持つ学生を、学部の特を超えて育てます。

専修大学における学びの“入口”

大学における学修では授業に出席して講義を受けることや、教科書だけではなく参考文献など基礎文献を読むことに加え、自らの関心や勉学の目的に沿って、自主的に勉学に取り組むことが求められます。

大学生生活のスタート地点において、平成26年度以降に入学する全ての学生が触れる領域が左図「専修大学 新たな学士課程教育 詳細」内における「転換教育課程(専修大学入門科目)」と「導入教育課程(専修大学基礎科目)」。

ここでは、専修大学における学びの“入口”である2領域についてご紹介します。

◎「転換教育課程(専修大学入門科目)」

「転換教育課程」は、新たな学士課程教育の3層構造の1層目にあたり、専修大学入門科目として少人数制の「専修大学入門ゼミナール」を展開します。

ここでは、専修大学出版局で発行する『知のツールボックス』をテキストに、高校までの学習から大学における学修への転換を図り、専修大学の学生としての自覚を持ち、大学での学修に求められる基本的なスキル(＝アカデミックスキル)を身につけることが目標となります。特に「専修大学の歴史」の回では、DVDを視聴しながら、専修大学の歴史と理念(社会知性の開発)を知ることで、新入生に専修大学での学修や大学生活への意欲を持ってもらうこと、専修大学に愛着を持ってもらうとともに、専修大学生としての自覚を持ってもらうことなどを目的としています。

◎「導入教育課程(専修大学基礎科目)」

「導入教育課程」は、新たな学士課程教育の3層構造の2層目にあたり、「専修大学基礎科目」を展開します。1層目の「転換教育課程」と並行しながら、あるいは学んだのち、3層目の「教養教育課程」と「専門教育課程」に進むための基礎を養うため、初年次に履修することになります。

また、「導入教育課程」で展開する科目群を学ぶことにより、以下のように社会で求められる基礎力を養成します。

- 外国語を運用する…外国語基礎科目
- 情報を分析し活用する…基礎統計学、情報リテラシー関連科目
- 複合的な視点で観察し思考する…基礎自然科学
- 自分の将来を切り開いていく…キャリア教育関連科目
- 自分の健康を維持管理する…スポーツリテラシー



朝日新聞出版『大学ランキング』
中村 正史 編集長

なかむら・まさし／長年にわたり教育・大学問題に携わり、『週刊朝日』記者時代の1994年、『大学ランキング』を企画し創刊。『週刊朝日』副編集長、『AERA』誌面委員などを経て、現在は教育・百科本部長として教育関連媒体を統括。

大学4年間で何を学んだかを
企業が重視する時代になった

大学教育が変わる

一人ひとりの将来につながる学びへ 新・学士課程教育スタート

〔平成25年11月29日朝日新聞掲載〕

学部の枠を超えた 歴史的な改革を実施

中村 グローバル化や少子化などにとともに、今、大学のあり方が大きく問われています。大学教育の中身をどうするべきか、各大学が真剣に考えています。

矢野 時代に応じて大学に求められるものは大きく変わってきています。今は高校生のほぼ半数が大学に進む時代です。そのような状況に対応したシステムを早急につくる必要があります。

中村 様々な大学が改革を進めていますが、専修大学でも学部のカリキュラムを大きく変えるそうですね。

矢野 これまでは、多くの大学と同じく教養科目と専門科目の2つの区分でしたが、来年4月から「転換教育課程」「導入教育課程」「教養教育課程・専門教育課程」の3層・4領域からなる「新・学士課程教育」を導入します。

中村 新カリキュラムは、学部の枠を超えた全学規模のものだと聞きます。まさに歴史的な改革だと思いますが、その狙いはどんなところにあるのでしょうか。

矢野 複雑化し、課題が山積しているこれからの時代を生き抜くには、どんな状況に置かれても自ら課題を見つけ、解決していく力が必要です。私どもはそのような真の知力を「社会知性」と呼び、学生に身につけさせたいと考えています。そのうえで、基礎から応用へ着実に、スムーズに移行できるカリキュラムが何より大事だと思っています。

半年間の専修大学入門ゼミナールで 大学の学びを知る

中村 その最初のステップが「転換教育課程」で展開される「専修大学入門科目」ですね。

矢野 大学進学率が約5割となり、学生が多様化するなか、大学にも学生へのきめ細かいフォローが必要になってきています。転換教育課程では半年間、大学の学びとはどのようなものなのかを知ってもらうための、全学共通の専修大学入門ゼミナールを行います。20～25人ほどのゼミ形式で、レポートの書き方や発表の仕方など、大学生活で必要な基本的なスキルを修得してもらいます。大学で学ぶことの意義、本学の歴史や建学の精神についてなど、専修大学のアイデンティティを学ぶための授業でもあります。

中村 今、1年次からゼミを導入する大学が増えていますが、とてもいい傾向だと思います。「転換教育課程」の後に続く「導入教育課程」とはどのようなものですか。

矢野 大学、また社会で求められる基礎的な力を身につける課程です。どんな学問をするうえでも必要なデータ分析、情報リテラシー、自然科学系の知識、語学やスポーツリテラシー、またキャリアデザインについてなど、幅広く学びます。ここで基礎をしっかりと固めたうえで「教養教育課程・専門教育課程」へと進みます。

中村 近年、教養教育の重要性が再認識

され、学部では教養を幅広く学ぶべきだという流れがあります。専修大学では教養と専門を大学教育の大事な両輪として、同列に位置づけているのですね。

矢野 教養科目と専門科目を連携させ、広い視野と専門知識を同時に伸ばしていきたいと考えています。さらに「学際科目」「テーマ科目」「新領域科目」など、専門と教養をつなぐ「融合領域科目」も用意しています。専門教育課程になった時、これが本当に自分がやりたいことなのかと疑問をもつ学生も少なくないきます。そんな時、「融合領域科目」によって広い視野から専門の学問を見直すことで、その意義を再発見することもあるでしょう。

中村 経済学部や法学部に入ってくる学生は、必ずしも最初から明確に学びたいものがあるとは限りません。大学に入ってから、自分が本当に学びたいことに気づくこともあります。そのような学生の変化に、柔軟に対応できる仕組みは大事ですね。

地域の課題を解決する インターンシップも

矢野 ディスカッションを重視した双方向型授業、問題解決型授業などにも力を入れています。例えば、川崎市の中小企業を訪問し、地域振興に貢献する活動を行っているゼミもありま



専修大学
矢野 建一 学長

やの・けんいち／1972年に専修大学文学部を卒業後、同大学文学部教授、文学部長などを経て2013年から現職。専門は日本古代史、日本文化史。

厳しい社会で生き抜く力を
着実に磨いていける環境に

新時代をみすえたキャンパス整備

～未来へ羽ばたく学生の学び舎として～

神田キャンパス

● 神田5号館

2014年4月から神田神保町専大通りに面する“新しい顔”として「神田5号館」が稼働します。

地上7階・地下1階、敷地面積670平方メートル、最大延べ床面積3350平方メートルの新校舎では、高層階(4～7階)に最新設備を持つ5教室を配置。また低層階(1～3階)には、学生が交流し、共に学び合うラーニング・コモンズ*1を整備。機能が異なる8つのアクティブラウンジと、グループ学習可能なスタディラウンジを4室配置します。

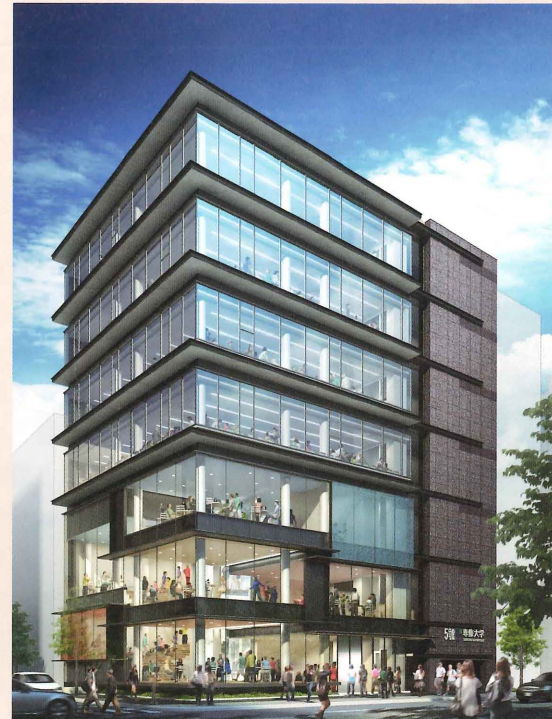
授業機能に加え、一人ひとりの学生が「考える・まとめる・情報を獲得する・交流する・表現する」といった、アクティブ・ラーニング*2を促進するための学習支援機能を有する校舎です。

※1ラーニング・コモンズ

…複数の学生が集まって、電子情報、印刷物等を含めた様々な情報資源から得られる情報を用いて議論を進めていく学習スタイルを可能にする「場」を提供するもの。

※2アクティブ・ラーニング

…教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等、学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図ります。



神田5号館イメージ

生田キャンパス

● 新生田2・3号館(仮称)

2011年3月の東日本大震災の影響により、損傷を受けた2・3号館を解体した跡地に「新生田2・3号館(仮称)」を建設予定です。

現在、大学院の教育・研究は6号館が利用されていますが、教育環境の充実を図るため、大学院機能を3号館跡地に建設される地上7階建ての高層棟内へ移転させる計画です。

また、2号館跡地にはラーニングスタジオ等を配した地上3階建ての低層棟の建設を計画しています。2つの新校舎は高架式の連絡通路で連結され、生田キャンパス正門前に新しい教育研究の拠点が誕生する予定です。



新生田2・3号館(仮称)イメージ

前頁までご紹介した「新たな学士課程教育」をもってソフト面の改革を進める一方、学生たちの学びを促進させる新たな教育空間を創出するべく、専修大学ではハード面の教育環境整備にも取り組んでいます。

2014年以降、神田・生田両キャンパスに新たな施設が続々と産声をあげます。

● 専修大学国際交流会館 (Senshu International House)

専修大学は世界17カ国・地域21大学と国際交流協定を結んでおり、学生、教員ともに活発で多彩な交流を展開しています。

この度、更なる国際化推進のため、生田キャンパスに新たな国際交流の拠点を開きます。

新設される「専修大学国際交流会館」は、生田10号館から徒歩1分の立地で、建物と周囲の自然の調和が考慮され、やわらかな自然光が差し込む設計になっており、2014年6月より開館を予定しています。建物は、地上3階・地下1階、敷地面積2827.49平方メートル、最大延べ床面積4140.77平方メートル。国際交流協定校からの交換留学生や日本語・日本事情を学ぶ短期留学生、本学学生による留学生アシスタントが滞在する学生寮、海外からの客員教授、研究者が宿泊するゲストルーム、留学生との交流イベント開催やグローバル人材育成のための講座実施等多目的に利用される山田長満インターナショナルホールからなる複合施設です。学生寮の部屋は全部で52室あり、2人1室を基本としています。また、車いす利用者が滞在できるようバリアフリー対応の部屋も備わっています。現在の留学生寮である国際研修館と比較すると、収容規模は2倍以上になります。

「専修大学国際交流会館」は、単なる宿泊施設というのではなく、留学生と日本人学生が日常的に交流する環境の中でグローバルな人材を育成する教育寮としての機能を有しています。この新たな国際交流の拠点では、本学学生のためのグローバル人材育成プログラムである「寮内留学プログラム」の実施を予定しています。「寮内留学プログラム」とは、専修大学国際交流会館にレジデント・パートナー(RP)として約6か月間入寮し、21世紀ビジョンの下、短期留学生との共同生活を通じて異文化理解や国際コミュニケーション力を養うプログラムです。日本にいながらにして24時間の異文化体験が可能となります。



専修大学国際交流会館イメージ

● 生田新体育寮・新体育館(仮称)

既存の体育寮と体育館の機能を集約し、「生田新体育寮・新体育館(仮称)」の建設が始まりました。

地上3階・地下1階、敷地面積3624.44平方メートル、延べ床面積4627.40平方メートルの新しいスポーツ施設は2015年1月の完成を目指しています。

学生用の部屋は4人部屋が60室。ベッド、勉強机、収納スペースを1つのユニットとして、4人の学生が交流できる場所を確保しています。同じ競技に取り組む仲間、先輩・後輩をつなぐ親睦が深まるだけでなく、お互いが切磋琢磨する中で、スポーツにおいて重要なチームワークも自然と育まれていくことでしょう。

体育館は、2層から成る体育室2室で構成し、吹き抜けの広々とした空間です。空調を完備し、窓を閉じて使用しても競技者にストレスを与えないと同時に、騒音が外に出ないように近隣に配慮した設計がされています。



生田新体育寮・新体育館(仮称)イメージ

「Si-report」

「Si」とは……

「社会知性:Socio-Intelligence」の頭文字 [S] [I]

と

「SENSHU Intelligence」の頭文字 [S] [I]

を表現しています。

本書は、専修大学のビジョンと現状を

リポートしていきます。



シンボルマーク&カラー



Sの字は専修大学の[S]と21世紀ビジョン「社会知性 (Socio-Intelligence) の開発」の[S]であり、そのSのブルーと曲線は大海原を表します。それが、地球に見立てた緑の球体を包み込んでいる様は、専修大学で「社会知性」を育んだ人材が世界に輩出され、大海原のように激しく変化する国際社会の波に乗り、世界で活躍する様を表現しています。また、地球を表す球体は、大学のスクールカラーを使用しています。



専修大学マスコット
「センディ」

マスコット

体育会のキャラクターとして使用されているデザインをもとに、より多くの人に愛されるように更にかわいらしくデフォルメしました。獅子の顔と鳳凰の羽を配したこのデザインは、若者たちに、無限の可能性を持つ未来へ力強く羽ばたいて欲しいという思いが込められています。

専修大学のシンボルマーク&カラー・マスコットは2004(平成16)年に制定されました

専修大学 学長室企画課

(神田校舎)〒101-8425 東京都千代田区神田神保町3-8
(生田校舎)〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1
Tel:044-911-1252 Fax:044-900-7803
<http://www.senshu-u.ac.jp/>